

フォーム・イン・アート

増田 洋

触覚——手触り——ということは、このところ見直されている。

この場合の手触りとは、単に手で触れるということではなく、触覚にもとづいた感覚による情報の発信と着信のことであり、肌、口唇、性感帯など身体各部の、つまり、聴覚と視覚および言語機能を除いた感覚系による、情報の発信と着信の様相であると考えるのが適当であろう。

これまで、美術の領域においての情報の発着信は、視覚領域に限定されているものと考えられてきた。他の感覚が参加してくることは、美術の意味や表現、あるいは価値を語るのに必要でないという考えは、われわれが西欧の文化主張に耳を傾けて以来、われわれの思考の中に定着したものである。

リアリズムということばも、そのようにしてわれわれのものになった。

さて、ふり返ると、わが国の美術伝統は、他国文化には例が無い屏風絵という絵画形式、あるいは、絵巻物と呼ぶ絵画形式、さらに掛軸表層に仕立てる絵画形式の三者を、長く保持し発展させてきた。この三形式の絵画は、収納と展示そして再び収納する行いにとって、きわめて便利である。またその行いをするにあたり、屏風では繰り広げることと折り畳むこと、絵巻の場合は繰り延べることと巻きもどすこと、掛軸は巻きおろすことと巻き上げること、という三者三様の方法が行われる。

三者三様の方法のいずれにしても、鑑賞の場を設けるためには、自ら身体を動かす必要がある。隠されている鑑賞の対象を明るみに出し、再び隠された状態に戻すという時間の進行は、わが国の美術伝統が価値ありとした奥ゆかしさ、ひそやかさ、寂しさ、わびしさなどの情感に添う、感覚の情報発信と着信の機能を洗練するものである。もちろんわが国の美術伝統における鑑賞も、また視覚体験を最も重視する。だが、手触りもまことに大切にされてきた。

しかし、わが国の大勢が、社会を近代化することに価値を認め、多くの現象に対して西欧文化のもたらすものを受け容れる過程で、手触りと鑑賞との関係を忘れてしまった。

ところで、身体的ハンディキャップによって社会生活に不利益が生まれることは不正であるとする米国、欧州の社会で近年試みられている、視覚障害者が美術を創作する場を設ける行いは、美術における触覚の動きとその重要性を、深く認識させ始めている。

兵庫県立近代美術館の「フォーム・イン・アート」展は、フィラデルフィア美術館の教育部門が独自に開発した、三年間の教育課程による、成人の視覚障害者を対象にした美術教室の卒業制作展である。「フォーム・イン・アート」は、この教室の名称である。

触覚にもとづく技法を主にした作品は、視覚だけの鑑賞では一見稚拙に見えるが、手触りを添えると作品が発信する感覚情報は、内なる琴線を動かして新鮮である。この展覧会は、弱者救済や福祉の成果を訴える展覧会ではない。美術における触覚の復権を主張する展覧会である。さらにわが国の美術伝統のわび、さび、幽玄を、言葉あそびから実感へと甦らせる触覚を蘇生しようと呼びかけるものである。 (1989年8月)

(ますだ・ひろみ／元・兵庫県立近代美術館次長)

※「美術の中のかたち」シリーズ初回展にあわせて、当時の美術館次長・故増田洋氏が美術雑誌『日本美術工芸』に寄稿した文章です（同誌掲載時にはペンネームを使用）。本文は増田洋著『学芸員のひとりごと 昨今美術館事情 増補新装版』（1997年、芸艸堂）より転載しました。